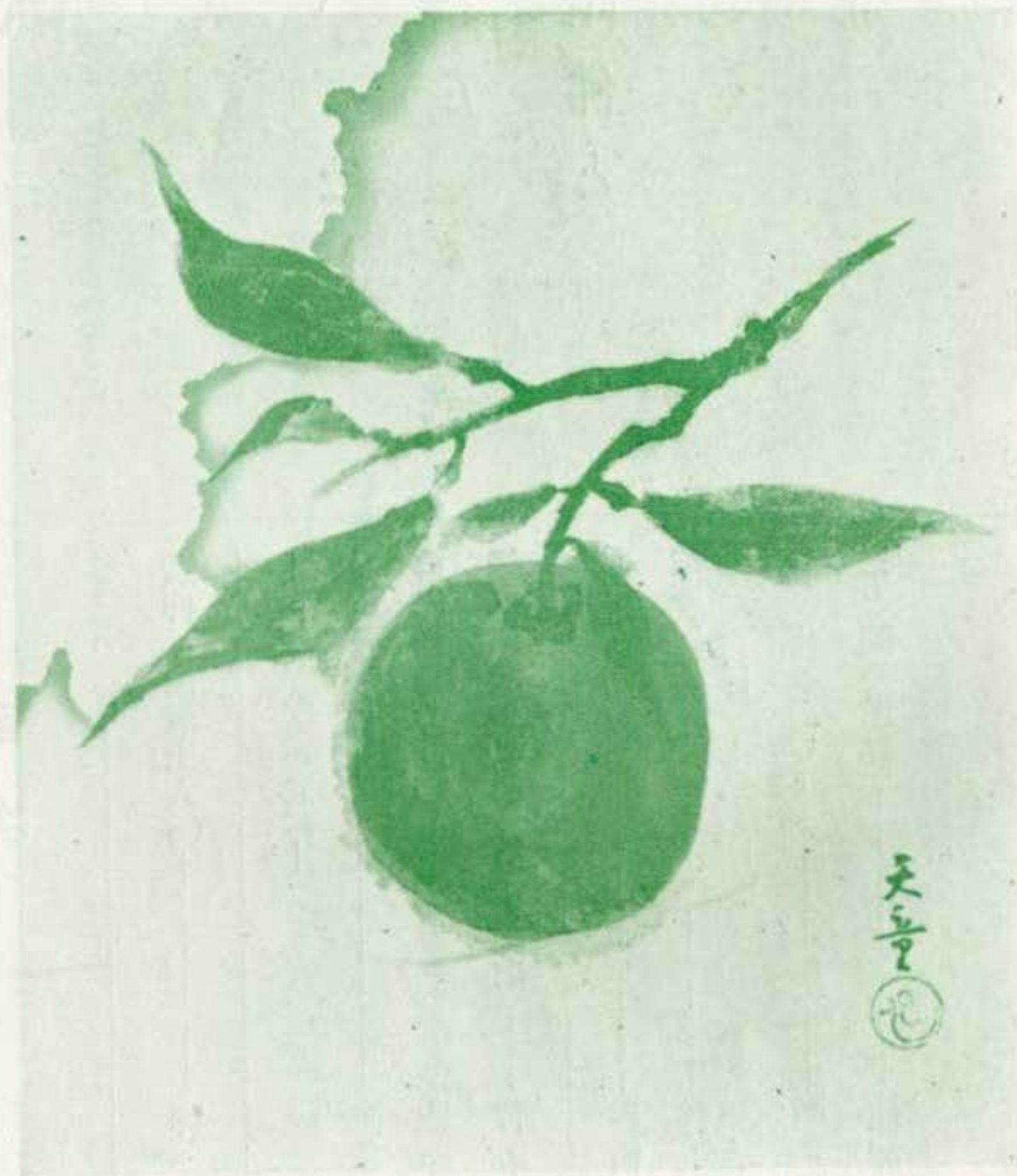


土 淨



天
章
印

五月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一週一日發行）
昭和二十二年四月二十五日印刷
昭和三十三年五月一日發行

第二十三卷

第五號

御歌

これを見ん

をのくごとに

思ひでて

南無阿彌陀佛と

常に

稱へよ

目次

巻頭言……………(1)

鑽仰 法然上人(一)……………林 隆碩(2)

―悩める人々の爲に―

幸 福……………三枝樹正道(4)

自己発見の悦び……………昆野秀賢(9)

信仰になやめる人のために……………竹中信常(14)

大樹寺を訪ねて……………大橋 俊雄(20)

隨蓮の往生……………村上 博了(24)

―本願の念佛―

滯印日記(四)……………春日井眞也(26)

光と美の世界……………佐藤賢順(29)

觀無量壽經講話(その四)

佛教の歌ごえ

曾つて學生の時、一度、私共のささやかな合唱のサークルが、上野寛永寺で、佛教音樂の一、二曲を撰んで佛前に奉唱し、亡き弘田龍太郎先生に聞いてもらつた事がある。別に聴衆もなく、行事の一つでもなく、歌うものだけが、ぶっつけに歌つただけの事であつた。終つて茶を頂き乍ら、先生は「歌の巧拙はともかくとして、佛前に敬虔な氣持を歌で捧げるといふ事は、淨らかな感動を與えるもので、私も感銘深く聞きました。」と云われた。當時の私としては、巧く歌いたい氣持の方が強かつたので、前半の巧拙はともかくとしてという言葉にかなりがっかりしたが、ふしぎと、今になつても、その時の佛前に歌うという氣持が、コンクールなどでの緊張した氣持と又異つて、至純な緊張として想起されてくるのである。確か一曲は九條武子詩の「心の合掌」であつた。

特に合唱による歌い手同志のハーモニー感からくる心の交流、形成する美、聖なるものへの感動は格別である。キリスト教が西洋音樂の發達を持らした如く、其昔邦樂も又佛教音樂が基調となつて發展した。しかし、時代と共に初め程には佛教音樂は華々しい發展をみなかつた。昭和になり、佛教音樂の名の下に、一流の作曲家による名曲が次々と生れた。だが、曲としてはよくても音域が廣く、高尚で、歌いづらい點があつたり普及に力がなかつたりでポピュラーたらず残念である。若い人はとにかくとして、佛教信者は、かなり喉の固くなつた年齢層に多いのであるから、歌いやすい手頃なものが、其前に望ましい。最近中央都市では、佛教音樂の研究が進み喜ばしい事であるが、地方寺院でも、もう少し機會をつかまえては、禮讃和讃の類を實行する事から初めて、歌による法悦を勧める必要がある。

鑽仰 法然上人 (一)

林 隆 碩

御登山の年時について

登山の年時に就いては三説あります。

一、勅傳第二卷に、童子十五歳、近衛院御宇、久安三年春二月十五日に登山す。

二、選擇念佛集秘鈔一に、十四歳より登山して黒谷慈眼房の室に入る。

三、決疑鈔見聞第一に、志學とは十五歳である。但し相傳には十三登山である。故に決疑鈔異本には十三登山となつてゐる。

已上の三説の中、十四歳説は秘鈔だけの説であつて、古來より用いられてゐない。

十三説は、四卷傳第一、源空上人私日記、十六門記、殊缺二卷傳、十卷傳第一、西方指南抄等であります。寂惠上人の決疑鈔見聞には前記のように十三歳、登山受戒とあります。これに對して問師さまは直牒第一に十五歳説を力説

されてあります。だがこれは建立困難であります。

何故に此の兩説が出たのであるかと申せば、三個の理由を考うべきである。

第一は、久安元年と久安三年の元と三の形字上の類似から誤を生じたのである。

第二は、登山と登壇との發音の相似からである。

勅傳三に、久安三年十一月八日、花髪をそり法衣を着し戒壇院にして、大乘戒を受け給にけりとある。登山と登壇の誤り。

第三は、文章上からの誤り、決疑鈔の序に志學にして登山すとある。これは常識上からは十五である。これを舞勾にして登山とすれば間違はなかつた筈であります。(舞勾は十三のこと)

十三、十五の兩説は單に年時の相違であつて、法然上人の教學に何等の影響があるわけでないから、其の何れでも可いかに見えますが、これを天台の教學上から眺めますと、

重要性の異なるものがあります。

籠山十二年の制

十三登山として、廿四歳の南都訪問を合せ考へますと、そこに天台宗的に深意を存するのであります。それは籠山十二年制の事である。根本大師の顯戒論に蘇悉地羯羅を引いて以て十二年一期籠山が證されてある。そもく傳教の理想は、道心ある佛子は西に菩薩と稱し、東に君子と號する眞人教育にある。此の眞人に由つて人類の向上と國家の發展を期すべきである。それが爲めには圓頓の大戒に由子のでなければ他に道はないものと大聲叱呼しなされ、而して今大師が企圖せる圓頓の大戒を実行し大類菩薩を養成するの法如何んを見るに、凡そ六條式によれば天台法華宗の傳法者は圓の十善戒を授け菩薩の沙彌とし、大戒傳授の後は住山十二年山門を出でずして、遮那止觀の兩業を修學せしむ即ち止觀のものには、年々毎日法華、金光明、仁王等の護國の諸大乘至を長轉長講せしめ、遮那業の者には、歳々毎日、遮那、孔雀、不空等の護國の諸眞言を長念せしめ、而して後、その機に應じて、國寶、國師、國用となし、各々物心兩面の事業にあたらしめ、佛法を久住せしめ永く國家を利せんことを圖り給うたのであります。

傳教の當時は、授戒後籠山十二年の制は嚴行されたようであるが、法然上人當時は残んど勵行されてないのであり

ます。にもかゝらず元祖の廿四歳は在山十二年の過程を終え、其の而して後の南都往訪である。

勿論、法然上人の在山十二年は足掛け十二年で滿十二にあらず、しかも授戒後の十二年でないから、單なる名目上の類似に過ぎないが、しかも此十二年間、根本大師の嚴制に遵うて、足一步も山を出でず、天台の學徒として、如法如實に天台の學侶、天台の行者であつたことは、元祖の眞面目を窺う上に於いて、洵に重要な一面であらねばならぬ、後年善導の御疏に見入り給ひ反覆研鑽、前後八遍の味到は恐らく籠山十二年の眞面目なる探眞への傾倒の轍をふみなされたものと尊信します。さらに念佛の自行化他の自信教人信は往生極樂への要行であるは無論のこと、佛法を久住せしめ永く國家を利する。國寶、國師、國用の妙法である。我が祖に、寶、師、用の詞はないが、籠山の聖者としての法然上人に、あるべきが當然であります。かくの如きは意を先にして見るべきである。

次に、源空の源は源光の源とされておる。しかるに源光には僅に五十日の就學である。よしや初師であるにせよ、如上の如き淺因縁にして此事ありとは思はれず、十三登山とすれば約三ヶ年の師事であるから、かくてこそかゝる結果を産んだものである。これからしても十三登山と申さねばならぬ次第であります。

悩める人々の爲に

—其の一—

幸 福

世に『猫に小判』と云う諺がある。猫にはどんな立派な価値の高いものを與へても何の役にも立たぬ。タトエ小判を與へても小判としての価値を發見することは出来ない。

ダカラ猫には魚の一片でも與へた方がよいのである。小判を小判として価値づけるものは、それを使用する人間である。十萬圓の金を十萬圓以上にも、十萬圓以下にも、その価値を現すのは、それを使用する人間の力である。十萬圓の金に価値があるのではなく、それを使用する人間の力がその価値を創り出すのである。百萬圓の寶くじを當てゝ家族親類を幸福にした人もあるが、又百萬圓の寶くじが當つたがために、神經衰弱になつた人もある。家財を失つて始めて立派な人生を送つた人もあれば、親の富める遺産を承け繼いで墮落した人もある。貧乏であつたが爲に互に相い

助け合つて幸福な生涯を暮した人もあれば、遺産があつたばかりに相續争いをして不仲となつた兄弟もある。

幸福とか寶とか云うものは、他人から與へられるものではない。『運は寝て待て』とか、『ぬれ手で粟のつかみ取り』とか云うが、ほんとうの幸福、ほんとうの寶はそんな他から與へられるものではない。自分自らが創り出すものである。財産にしてもそれ自身は幸福でも寶でもない。それによつて人が幸福を作り出し、それを寶とするのである。だから人によつては、その財産が反つて災をなし、不幸を創り出すこともある。知識にしても、それによつて人が幸福を創り出すのである。人によつては知識の爲に不幸な人生を送ることもある。このことを知らずして幸福を求めようとしてもそれは無駄である。いつまで経つても幸福

三 枝 樹 正 道



にはならないのである。

一體幸福と云うものがどんなものかとも知らず、従つてそれを求める方法も解らない。それでいて幸福になりたい幸福を求めたいと思つてゐる人がある。而して幸福が來ないといふ云つて幸福を嘆き不運に悩む人がある。これは當然のことであるが、吾々は容易にこの事に氣がつかない。世の中にはこんな人が澤山にいる。それだからいつまで経つても幸福な社會にはならない。不幸の連續と云つてもよい。

現實の社會に目を轉じて見ると、『ほんとうの美』を知らずして『美』を求めている人がある。自分の顔の道具と無關係に白粉をつけたり紅を塗つたりして美人となろうとしてゐる女性がある。只だけばくしい色さへあれば美だと考へてゐるらしい。實は少しも美しくない。又衣服の形色の調和も考へずして目立つた衣裳を看けて美と考へてゐる人もある。反つて野卑であり、その人の教養の低さを現している場合すらある。重そうな耳飾りをつけたり、太い足にハイヒールをはいたりして、いかにも美装と考へてゐる人もあるが、滑稽に見えて氣の毒にも感ぜられることがある。男性にしても徒らに流行色を追つたり、頭髮の手入れを入念にしてスマートだと自惚れている人もあるが、これらの人は『美』を何と考へてゐるのであろうか。美とはどんなものを實のところ知つてゐないのであろう。だから何でもよいから色を並べたり形を變へていたら美しいと

考へてゐるらしい。こんなところからは美は出て來ない。求める目標をハッキリ知らないのであるから無理もないが、只だ混雜があるばかりであり、盲動があるばかりである。美とは調和である。調和の無い所に美はない。

又ほんとうの『眞理』を知らず、眞理の廻りをウロ／＼しながら眞理を求められないと嘆いてゐる人がある。この頃の學校への入學の問題もこゝに原因してゐるのである。大体上級學校へ入學するのは何の爲であるかと云う目的がハッキリしてゐない。學校は何をするところであるかさへハッキリしてゐない。只だ何かしらないが人も行くから自分も行く、他家の子供が入學するから我子も入學せしめねばならぬと考へてゐる人がある。中には又卒業後の就職條件が良いからだとか、俸給が多く貰へるからだとか考へてゐる人もある。そういうこともあるかも知れぬが、それは學校存在の眞の意義でもなく従つて入學せしめて教育するほんとうの目的でもない筈である。學校は勉強するところであり、研究するところである。勉強の結果、教養が高くなり、研究の結果、知識が廣くなり深くなつて、その爲に有要の人物としてよい職が與へられ、従つて俸給も高く與へられる結果となるのである。この意義が誤まられてゐる爲に、出來る子も出來ない子も適當な子も不適當な子も、そんなことは一切考慮せられずに、徒らに上級學校へ入學せしめ、そこを卒業させて、その結果就職難をかこつ人が

多いのである。少し考へたならばすぐわかることであり、一寸反省したら氣のつくことであるが、このわかりきつた正常な道が歩まれていないのはまことに残念である。こゝに現代の不幸もあり悩みもあるのである。眞理を窮めるべき學校が眞理に添うて活動しておらないところに悩みの原因がある。この悩みを探究し適材を適所に進ましめることこそ眞理である。

又世の中には健康を求めながら不健康になる行動を取へてなしている人もある。健康を求めながら健康に最も悪いと云はれる大食變食をしている人もあれば、朝寢夜耽かしを續けている人もある。又適度の運動もせず遊墮や精力の浪費にその日を送つてゐる者もある。又心配が何よりも健康に害があると云うのに健康になろうと心配している人もある。これ等は全く以てその方法を誤つてゐるのである。これではいつまで経つても健康にはなれない。恰も東へ行くとして西行きの汽車に乗つてゐるようなものである。益々遠ざかつて行くばかりである。

これらは何れも目標がハッキリしていない爲に現れる悩みであり、従つてそれに行く方法も知らず、盲目盲動と云つてよい。これでは幸福は出て來ない。富士山が山であるか森であるか都市であるかも知らず、従つてそこへ行く道も何も知らずして、富士山へ行きたいと右往左往してゐるようなものである。動いても走つても容易に富士山へ行け

る筈はない。そんな馬鹿な者は居らぬと笑うかも知れぬが、隨分これに類似したことを吾々は作つてゐるのである。青い鳥を求めて旅に出たチルチルミチルが何處に幸福を發見したであらうか、よく考へて見る必要がある。

現實社會の不安不満不幸の原素は何であらうか、この不安・不満・不幸の原因はハッキリ見極める必要がある。それは政治の貧困であると云う人もある。物質の不足と云う人もある。科學の研究の不充分と云う人もある。人口の過剩と云う人もある。種々雜多の原因が擧げられる。勿論それらも一つの原因をなしておるだろう。否な私はこれらは皆大きな縁であり、原因はもつと他にあると思う。即ち私利私慾の心こそはこの不安不満不幸の根本原因である。この自己を中心とする自分勝手な考へ方が根本的な過誤の原因である。

佛教は一切の迷を轉じて悟を開かしむる教である。眞理を教え眞理に順はしめることを教えるのである。佛教の教える眞理とは現實の眞實相である。生命の實相である。宇宙の大眞理である。即ち

(一) 諸行無常——ものみな移りゆく、總べてのものは生きてゆく、暫くも停頓してゐない。生命は生命を創造してゆく、この流れゆく生命、生きてゆく「いのち」を小さく區切つて我がものと考へる時に迷妄が生じ、迷執に煩はされるのである。淡々として流れゆく生命の中に安住すれば不安も

なく不満もなく、一切の迷執を離れ、一切の過誤から解脱することが出来る。佛教はこの大自然の眞理の前にあつて敬虔にして謙虚に、その眞實を眺めることを教えるのである。科學の研究もこの立場に在つて始めて大發見大發明を賞すのである。自我に愛着して自己を主張し、宇宙の大眞理を支配し、これを左右せんとする時、その自我の主張が通らないことを經驗して不満を生じ、不幸を感じるのである。茲に惱みが生じてくるのである。それは『ものみな移りゆく』と云う『いのち』の眞實相をハッキリ確認せないからである。

(二)諸法無我—何ものも私すべきでない。總べてのものは相依り相扶けて成立しているのである。仕事においても自己獨りでは何事も出来ない。周圍の多くの力の結合によつてよく一事が行はれるのである。又一つの物が出来るのも、それ自身で成立しているのではなく多くの物的勢力的な力の結合によつて始めて一物が生れて來ているのである。よく省察すれば私自身のものと考へられるものも何一つとして私の獨力で出来たものはない。家、家財道具は勿論、衣服、日常の使用品等に至るまで、總べて社會の人々の力によつて出来たものである。更に進んで自己の身體すらも多くの動植物の物的力の結合によるものである。精神の内容すら多くの社會的遺産の賜である。このように考察してみると、總べてのものは因縁の和合によつて顯現したもので

あり、自我そのものも他我があつて始めてその存在を意義づけられているのである。汝なくして我は成立しない。總べてのものは孤立でなく、相寄り相扶けて始めて現れたものである。従つて一切のものは私すべきものでない。愛着すべき自我もなく、すべては集結された力である。だから自己の力と考へらるるものは、總べて一切の爲に提供し周圍の一切と互に相扶け合つてゆくべきであると佛教は教えているのである。

(三)涅槃寂靜—總べてはありのまゝ。天眞の相は何一つも増減すべきものもなく、差別の儘で平等であり、平等の儘で差別である。只だ自己に愛着するがために、種々の差別相が現れるのである。『柳は綠花は紅』とはこの境地であり、『焰は空に昇り、水はくだりさまに流る』もこの相を表したものである。雨の降る日は天氣が悪いとすなおに受けとれる境地になれたならば悟りである。人を欺きながらこれを隠そうとしたり、虚言を語りながら正直な姿を見せようとすれば惱みが生ずる。惡事をして而も善人であるかの如く振舞うのは苦しい事である。一切の苦惱はこのような虚偽の世界の現實である。ありのまゝの世界、天眞の相こそは惱みの無い世界である。

すべての人は幸福を求めているが、幸福とは惱みの無いことである。惱みは無知に原因するものである。眞實相に對する無知不明が最も深い原因である。佛教ではこれを無

明と云う。そこで『ものみな移りゆく』と云う眞實相を確
認して、刻々に移りゆく人生にあつて寸暇も無駄にせず、
一瞬もおろそかにせず、その時その事に精進努力すること
が幸福を賞す根本原因である。だから怠惰こそは反つて惱
みの素であり不幸の原因である。怠惰の土地には幸福の花
は咲かない。又『何事も私せず』と云う無私の生活こそは
慈悲の活動の極限であつて、慈悲行は眞の淨土の生活相で
あり、幸福の完全相である。慈悲行は布施行であるが通俗
には享樂こそ幸福のようにも考えられる。然し貪慾享樂の
水には幸福の魚は生長しない。慈悲の池にこそ幸福の鯉は
躍るのである。このようにして精進と慈悲、全力を傾倒し
て活動し、互に助け合つて、相互に迷惑をかけない生活こ
そが、それが研究にあつても實業にあつても幸福の世界に
至る最高至上の道である。

又在りのまゝをありのまゝに受用出来ることが肝要であ
る。多くは自我によつて曲解して自己に都合よいように解
釋し理解するものである。この自我に愛着し、その爲に客
觀の眞實相を誤認し、誤解の上に構想を成立せしめるから
過誤に陷るのである。これが一切の悩みの素因をなす。互
に私利私慾を離れて、萬物を正觀して、正しき道を歩みた
いものである。幸福はこのような道の前途に微笑んでいる
のである。

京から大和へ

知恩院

忘れ傘仰ぐ顔々に春しぐれ

清水寺

春しぐれ數珠購ふ店を選び居る

金閣寺

春泥の徑竹林と林泉に消ゆ

春日野

馬酔木野に春泥の轍残しつゝ

法隆寺

梵音小さく春塵の厨子をろがみぬ

中宮寺

ふたゝびを春曉に來て親しめる

唐招提寺

初蝶や唐招提寺の徑の邊に

(兒旺遂平)

悩める人々の爲に

—其の二—

自己發見の悦び



昆野秀賢

悟りのみち

諺に「三人寄れば文珠の智慧」と申しますが、それは三人寄つて互に検討し各人の意見も尊重して反省し合い偏破でない正しい意見即ち立派な智慧を得ることでありましょう、他人の意見も聞いて自らも反省する處に協調の心が生れ此の協同調和の精神に依るならば如何なることも出來得るとの確信であると思います、佛を覺者と申しますが矢張り偏破でない正しい智慧と言うことを申して居るのであります。實際私達の日常には兎角自己中心の我儘な他人無視の考えや行爲が多く、これが爲に過ちに陥入ることが屢々あるのであります。自己の欲望や利害を離れて冷靜に物事を考えます時に、公平な批判も裁斷も出て來るのであ

ります。この心の落ち付きを禪定ぜんじやうと申しまして目覺め即ち片寄らない智慧を得る爲に大切な要素なのであります。

お釋迦さまの一生は惡魔と絶えず闘ひ抜いた生活だつたと申して居ります。目前に現れた有形の惡魔や無形の心の惡魔、即ち色々の偏見妄想邪見等の諸々の苦難と絶えず戦を續けられたのであります。然し惡魔が惡魔として眞向から現れて來た時にはそれに對應する覺悟があつたのであります。反對に味方のように裝うて現れた時には容易ならぬ苦勞があつたと申されて居ります。お釋迦さまは最後臨末に及んで「私は三十五の年から八十の今日迄四十五年の長い間、常に心の落ち付と正しい眞理を求むる智慧を失ふことなく努力精進を續け通して來た」と仰せられて居ります。何んと尊い極みではありませんか、こうした惡魔降伏

の實踐苦闘の中に終始された御生涯こそは實に目覺めによる悟りの生活とも申すことが出来ましよう。

救いのみち

お釋迦さまの體驗された悟りの道、即ち降魔實踐の生活は私達佛教徒の履むべき本領なのであります。智慧も優れ意思も強固であるならば或は出来るかも知れませんが、私達のように智慧もなく實行の足も拙い可弱い者の爲に佛の大慈悲に依つて守り育てつゝ導こうとする救いの道も説かれてあります。

熟く社會の實相を眺めて見ますと物質的にも精神的にも富めるものは少く、反對に貧しい者が極めて多いのであります。若し佛教が社會の淨化を目標とし、人類の救済を主眼とするならば佛の大慈悲は極めて多い可弱い落伍者の上により多く注がなければなりません、かくてこそ民衆の宗教としての使命が完うされるのではないでしようか。

「心して引くものなるを乳母車、獨りで行くと子や思ふらん」と云う歌があります。廣い世間には多くの人間が居りますけれど本心から信賴出来る者は何人あるでありましよう、世間からは良いの悪いのと罵られましても常に見捨てることなく親身に心を砕いて守り育て下さるのは唯だ親あるのみであります。こうした親あることに依つて子は安全に育てられて行くのであります。この親にも勝さる廣大無

邊のお慈悲を垂れましゝて暗路にさまようて浮ぶ瀬のないう私達を救い上げようと誓はれたのが阿彌陀さまであります。

私達は本當に自分を見直し一切の虚構を去つて赤裸々な自分を眺め返した時、切々に自分の無力さ醜さに氣付かせて戴くのであります。自己發見の悦び程威大なものはありません、戒めも善行も心の落付も智慧も及ばぬ淺墓な凡夫と知れた時、全く力盡き矢折れて進退谷つた時の叫びが、救の門の開ける時なのであります。否定の肯定と云う言葉があります自己否定の上に築かれた自己と云うものは反つて無限の廣さと深さとを以て展開されるのであります。

無學の學問

勝海舟は「學者になる學問は容易だが無學になる學問は困難だ」と言っております。自分の名譽とか榮達えいたの爲の學問や利害の爲に他を顧みないと云うような虚學を捨て、「我れ到らざるなり」という無學に徹した學問修業は容易でないというのでありましよう。そして海舟は常に「山岡鐵舟程の馬鹿になれば立派なものだ」と賞讃していたと云うことであります。

「學生骨がくしやうこつになりて念佛の行ぎやうや失はずらん」と法然上人も嘆かれています。

平安の末期源平戰亂の後の人心は、極度に不安を感じた時

代であります。この不安の直中に在つて民衆の爲めの念佛宗を勧められたのが淨土宗祖法然上人でありました。父の遺言と伝えられる「自分の安心し得る道」を求めて一切經を五返も讀まれたと云うことでありますが、讀むことに依つて一層自分の愚惡なることに痛感され「十惡の法然房愚痴の法然房が念佛して往生を遂ぐるなり」と申されて偏に彌陀の救済を仰いだのであります。

青年期に既に「智慧第一の法然房」と驚嘆され、「天台座主大僧正になり給え」と推賞された程の法然上人は是等の榮譽を耳にもせず只管父の遺言忘じ難く眞劍に道を求めてやまなかつたのであります。求むれば求むる程自分の劣惡さ無力さに感涙を催すのみでありました。承安五年三月善導大師の指南である「一心に専ら彌陀の名號を稱えよ」の文が、求め求めて得られなかつた苦悶の法然上人には正しく暗夜の明灯であつたことでございましょう。そして難行の聖教を捨て、一向に彌陀の救いに歸し「尼入道の無痴の輩に同じうして」と仰せられて爾來専修念佛の行者となられたのであります。

悦びに生きる

上人は彌陀の救いにあすかつた。心境を次のように述べられて居ります。

「わたしは長い間隨分と辛い修行もしたがそれは丁度水

に居て乾こうとすることにも増して果かないことであつた。心の惱みは次第に盛んになるばかり虚偽の生活は次第に深まるばかりでどうしても誠の道は開けないどうせ私のような者には佛の悟りの道は到底開けようもない。結局地獄の底に喘ぐより外に道はないものと思つていたら、幸にも阿彌陀さまのお慈悲の道に逢い奉つて、罪惡の此の身ながらにお救いに預ることが出來た。私は今でも念々の中に無限の罪を造つてゐる若し阿彌陀さまのみ教がなかつたらば日々夜々どんなに苦悶して居たことであらう」と述懐されて居られます。かくて淨土開宗後の半生はお念佛相續の悦びの中から感謝報恩の日常を續けられたのであります。

私達人間の終局の慾求はと申しましたならば、誰れしも生きたいと云うことでありましょう。酒や煙草が命に支障を來たすと醫者からでも注意されたら、どんなにすきな酒でも煙草でも止めて仕舞う程生命には執着のあるもので、出來ることなら永久に生きたいと念じています。又生きる爲には、明るい住み良い楽しい世の中になつてほしいと願つています。この二つの要求が「無量壽、無量光」で阿彌陀と云う意味だと申されて居ります。即ち阿彌陀さまに歸依し、み名を稱えることに依つて佛の誓である永遠の壽命と、明るい住み良い世界へとお導き下さるのであります。禪宗に獨湛と云う方があつて常にお念佛を稱えて居られま

したので念佛獨湛といわれていました。坐禪をする時も仕事をすると念佛を忘れたことはありませんでした。或る時一流の禪僧が尋ねて来て一問したのであります。あなたのお年は幾歳ですか」と申しましたら、獨湛は「私は阿彌陀さまと同年じや」と答えました。驚いた禪僧は「それでは阿彌陀さまの御年は」と反問しました處、獨湛は直に「阿彌陀さまは私と同年じや」と無雜作に答えられました。これを聞いた禪僧は獨湛の信仰が極致に達し佛の永遠の大生命の中に生きていることに深く敬服したと云うことであります。

阿彌陀さまの救済を仰ぎ、光壽無量の名號（念佛）を相續すれば諸々の惱みは消滅して身も心も和らぎ善心が自然に生れて参ります。又、身心の苦惱が漸次除かれて淨化されますので、壽命も長久し安穩になつて参ります。又名號を稱えることに依つて「佛^〇これ^〇を知^〇り給^〇う、聞^〇き給^〇う」の故を以て影の形に隨うが如く阿彌陀さまを始め一切の諸佛の護念を蒙ると説かれています。

かくて念佛の功德は無量無邊の光壽の中に守り育てられて坐の轉換（往生）即ち身も心も生れ變つて來るのであります。この心境この確信が社會に反映しましたならば報恩の實踐行となり、教化の活動力となつて現れて参ります。

又臨命終の時には、佛の來迎を蒙り不退轉の佛國土に往生の本懷を遂げさして頂き、彌陀觀音勢至の指示に従つて順

次果位を増進し、更らに現世に還り佛の補佐行として教化の使命を達成させて頂くのであります。阿彌陀さまの救はずば止まぬの大願力も要は往生より成佛の果位追進め、佛作佛行の實踐活動が本領であると信じます。

お釋迦さまの説れた澤山の御經の中で特に阿彌陀佛の功德に就て述べられた經文が實に百二十餘卷の多くに達し廣大無邊のお慈悲を説き、又無數の諸佛が阿彌陀佛の凡夫救済を立證し其の功德を稱讃して私達の爲に懇ろにお勧めになつておられます。此のようにお釋迦さま御自身、阿彌陀佛信仰の大先達をなされているのであります。私達は今更の如く新たなる感銘を阿彌陀佛の尊さの中に見出すのであります。

自己發見の悦び

妻鏡に「我が身を知らざれば心を以て心に迷へり、譬へば酒に酔ひたる者の自ら酔へるを知らずして酔はざる人を嘲けり、長夜に眠る者の夢の中に夢と知らずして寢言をするに似たり」と無住法師が諭しています。

佛教とは目覺めの教であります。悟りの道と言ひ、救いの道と申しましても結局自己の眞價を知ることであります。悟りの道の苦難を味つてこそ始めて易行の救いの道の尊さが判然と知られるのであります。

二祖の辨阿上人は「單聖道門の人（單に悟りの道にのみ

住す人)單淨土門の人(單に救いの道にのみいそしむ人)には淨土門の眞意知るべからず、聖道淨土兼學の人にして之れを知るべし。此の意を得てより一切の大乗經を披き一切の大乗論を見るに隨喜の涙禁じ難し、是れ即ち聖教の源底なり、法門の奥藏なり、佛菩薩の秘術なり。云々と淨土門に歸入した喜びを偽りなく述懐されています。

又、近世の篤信者宮崎安右エ門氏は、自己發見の喜びを「自己發見の喜び! それは誰れにもあろうけれど同じ發見でも生命の發見ぐらい素晴らしいものはない。悪いと知りながら惡より離れ得ぬ自分、なる程煩惱具足の凡夫なのだ!! と、ありのままの自分の姿を發見して、地獄必定と救われぬ此の自分に、ありのままでよい救うてやる!! と云う如來の喚び聲に本來の自分が發見された喜びこそ、喜びの中の喜びであろう。南無阿彌陀佛と云うお念佛こそ私に與えられた私の大發見だつた。このお念佛がやつと六十の坂を越して分らせて貰つたことは私の一生に於ける眞の自己發見となつた。それは聖道門で言う大死一番絶後に蘇生した自己ではない。大死の出來ぬ煩惱の強い私に、大死の出來ぬ惱ましい此の身とはつきりと知らされた處に、お念佛の尊さを感じお念佛を稱えさせて頂いたのだ、大死の出來ぬこの私が念佛によつて新しい生活が展開されたのだ」と痛切に信仰體驗を吐露されています。

こうした尊さ有難さを體得した時、私達の身心が蘇返つ

て生き／＼として來ます。そして言葉も生き業務も生きて眞に生き甲斐を感じるのであります。然し時には環境に支配されて暗路に彷徨しても隨犯隨懺の念佛が切に催し淨めさして頂きます。煩惱具足の凡夫なりと偏にみ佛にすがり念々に相續して任せざる時、生死共に煩いなしの大安心の境地へと轉進さして頂くのであります。(終)

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

淨土宗日常勤行式

○定價 一部金三十五圓

十部以上(一部につき三二圓)
百部以上(一部につき三〇圓)
送料實費

發賣中

○オフセット・美麗折本(香澤梵成師名筆)

内容(和讃勸式付)(吉田定久譯)

△香偈 △三寶禮 △三奉請 △歡佛偈 △懺悔偈 △三尊禮
△開經偈 △四誓偈 △本誓偈 △一枚起請文 △攝益偈
△念佛一會 △別回向偈 △總回向偈 △四弘誓願偈 △三身禮 △送佛偈

お申込は

東京都港区芝公園十九號地淨土宗事務所内

淨土宗教化團中央本部

振替東京六一九三九番
電話芝(43)一三八二番

悩める人々の爲に

— 其の三 —

信仰になやめる人のために



竹 中 信 常

一

春もまだ浅い、庭の白梅もやつと蕾をふくらましはじめた頃の、ある夜。私は出先に電話をうけて、長田氏の令嬢綾子さんの計を知った。昨年の秋、令兄が來ての話には、年内保てばよいがといわれていたが、それが更に今日まで耐えて來たのだから、その間の、本人の苦しみ、家人の心配はどんなだつたかと、暗然とした氣分になつて、私は長田家の門をくぐつた。

病名は何というか知らぬが、腦の前部にガンが出來たためであつた。後頭部の場合ならば、切りとることも出來たのだそうだが、前腦部のガンは日本では前例がなく、而も發見がおそかつたので、いかんともなし得なかつたのとことである。女學校の一年頃から、右の眼が段々見えなくなり、ソコヒではないかと、隨分眼科にも通つたが、それが

既に、前兆だつた。しかし、悲しいことに醫師も家人も、そんな深い原因とは氣付かずに、目の治療に専心した。無論、病狀はどんどん進展し、とうとう右眼失明という、花ならば咲きかけの可憐な乙女にとつて、いいような不幸が見舞つたのである。

この頃は、まださほどではなかつたが、更に、病勢は残つた左眼にも及んで來るようになる、さすが相當教養のある兩親も、現代醫學の限界の狭さに焦慮して、すすめられるままに、新興宗教 S 教團に入會して。幼少から手鹽にかけて育てて來、今や中學校も終え、高校にすすもうとする愛娘が、兩眼失明という、思つてもみない大患に犯されたのであるから、藥をも掴みたい心で、信仰の力をたのんだことには、眞情いつわらぬものが溢れて、他からとやかくいえるものではなかつた。

私は、そのようにして、心ならずも、從來の念佛信仰から離れて行く、長田氏一家の人々の姿を、むしろ悲しんで眺めていた。もちろん、何ごとも、彌陀のはからいと信じて、大願業力を念じて、稱名一本で心靜かに、自分等もうけるべき運命に耐え忍ぶべきを話してはみたが、現實に、間斷なく迫つて来る疼痛に、身もだえして苦しむ有様を前にしては、それは一片の空疎な文句に終つてしまつたのである。その時、私はしみじみと、人の心に信を植えつけることの、難中の難であることを思つた。

このようにして、今、その枕頭に坐して、痛ましくも白布に覆われて靜かに横わる令嬢のために、恭々しく一禮して、その冥福を祈つたのである。

兩親と兄とが、こもこも語る闘病の日の思い出を聞いてあげることがその夜の私に出來た、唯一のなぐさめであつた。病い篤くなつて病人の枕頭に、S教團の信者達が集つて、法華經を讀み、題目を唱えと、きまつて、本人の痛みが烈しく高まり、「母さん、私のところでだけはやめて下さい」と苦しげに訴えたとのことである。初めのうちはそれでも、なおしたい一心から母親は、

「それでも、こうやつて、みんなで拜んで下さると、きつと病氣がよくなるのだから、痛くても、うるさくても我慢するのよ」

と、なだめ、すかしてみたが、余り度々大勢で押しかけて

來、その度に、病人が苦しむので、自宅療養をやめて、入院させてみた。信者達は相かわらず家にやつて來て、佛壇の前で、大聲で題目を唱える。そのうるさいこと、家中の者の頭が變になるほどであり、近所からは「長田さんまでが、新興宗教に入られたのかね」と陰口いわれたりした。なおしたい一心の親心、無理からぬこととはいいいながら、氣のせい、家で題目をあげている、丁度その頃になると病院にねている病人の苦しみがひどくなつたようだ、あとになつて氣がついたそうである。

冷靜な心に歸つた今、當時のことを考えると、家族全體が何かに憑かれていたようだと、父親はさびしくもらした。令嬢自身は、學校の友達と一緒に、カトリックの信仰に入つていたので、病床にも、十字架を抱いていたのだが、S教團では他の宗教一切を、邪教として、形のあるものはみんなこわさしたり、すてさせたりするので十字架も當然、すてなければならなかつた。しかし、さすがに、それだけは病人のせめてものなぐさめとして、残こしておいてやつた。兄さんはそうもいつていた。

亡くなる時には、親しいお友達にかこまれて、讚美歌を歌つて貰いながら目を閉じたとのことである。

「もうコリゴリです」

「必らずなおるからといわれたのが死んでしまつたのですから、もう、一切御破算にしてもとのお念佛に戻ります」

「お佛壇も、もと通りにします。珠數も位牌もまた買いなおさなければなりません」

「亡つてからも、随分やつて来て、おどかしましたが、それなら、死んだ娘を生きかえしてくれといつたら、來なくなりました」

葬儀も終り、三七日の法要のあと、私はこうした言葉をきいて、矢張り、良識ある人は最後には、心のまなこを開いて、正しい信仰に甦るものであることを知つた。

二

「和尚さん、お袋に説教してやつて下さい」

「どうしてだね」

「實際いやになつちやうですよ。私が病氣になつたものだから、新興宗教にはいれつて、うるさくつてしようがないんですよ」

「なるほど、それは困るだろうね」

彼岸も終りに近づいた、割に閑散な日の午後、久々に高橋母息が來詣した節、母親を前にして、息子の一郎がいつた言葉である。

「大體、信仰なんてものは、本人がその氣にならなければ、どうにもならんことなのに、お袋は何でもいいから、頭から信じろつて、しつっこいんだからなあ」

「でも、お前の病氣がなおればいいぢやないか。わたしだつて、伊達や酔狂でやつてんぢやないんだよ」

「やりたきや、自分だけでやつてればいいんだ。何も、いやがる者に無理に押しつけることはないだろう」

若い内に夫を亡くし、女手一つで他人の下働きなどもしながら、どうやら育てあげた二人のむすこ。その兄の方が二三年來、胸の病いでブラブラするようになってしまつた。何とかなおしたいと、氣をもむのは當り前である。親の心も知らないで、何て憎らしい口をきくのだろう。そう思う母親の心の中は、手にとるようにわかる。

「まあまあ、折角お墓參りに來たのに、親子喧嘩をしたのでは、御先祖さまも怒つてしまふよ。もう少し、お互いにやさしくなつて話をするこゝだね」

「でもね、和尚さん。わたしは此子の病氣をなおしたいばつかりに、このお寺に不義理までして、一生懸命やつてゐるんですよ。それなのにこの子つたら、わたしが何か、悪いことでもしているみたいに、あくたれるんですからね。小さい時分のことを忘れて、一人で大きくなつたような顔して、にくらしいつたらありやしない」

「おやおや、それぢや今日は亡つたお父さんに愚痴をいひに來たみたいになつちまつたね。よろしい、亡つた佛さんの代りに、わたしが愚痴をきいて上げましょう」

「駄目ですよ和尚さん。そうでなくつても、お袋は愚痴ばいんですからね。それより、和尚さんから話してやつて下さいよ。信仰で病氣がなおらないつてことをね」

「一郎君、そう一概にはいえないよ。病氣の中には、心の持ち方でよくなるのもあるんだから。それより、お母さん、あんたは今日、お墓の前で何といつて拜んだんです」

「そりや、もう、一郎の病氣をはやくなおして下さいつて、佛さんにおねがいしましたよ」

「佛さん、きいて下れましたか」

「そんなこと、わかりやしませんよ。でもね、わたしの眞心は通じると思いますよ」

「なるほど、眞心は確かに通じましょう。だけどね。お墓の前で、拜んだ時だけ眞心になつたんぢやないですか。

ふだんは、佛さんのことなんか忘れて、商賣したり、一郎君と喧嘩をしたり……」

「そりやそうですよ。そう年中佛さんのことばかり考えていたら、商賣も出来やしませんからね」

「そうでもないだろう。この頃は三日にあげず本部へ出かけるぢやないか。朝でかければ夕方まで歸つて来やしない。それで商賣だなんて、虫がよすぎらあ」

「お前は駄つておいでよ。でもそうなんですよ。R會に入つてから、商賣の方がお留守になりがちで困つてゐるんです。色々の會や役があつて、出かけることが多くなつちまいましたね」

「それぢや、佛さんは喜ばないでしょう。商賣を一生懸命やつて、息子さんと仲よくしてこそ、佛さんが喜ぶので

はないでしょう。それを逆に、會に入つてからは、息子さんとは喧嘩する、商賣にも熱が入らぬではね。成程、本部の集りに熱心に出席すれば、役目も段々ふえて来て、教團の中では、えらくなるでしょう。あんたはR會の役員になつて、えらくなりたいんですか」

「とんでもない。わたしはただ、一郎の病氣がなおりさえすれば、それで充分なんです。別にえらくなろうとは思いません。でもね、かよつていゝうちに、次々に色々のことを言いつけられてね。それにもつと澤山お導き（會員をふやすこと）をしないと、むすこさんの病氣はなおりませんよ、なんていわれると、ついそつちの方に一生懸命になつてしまふんですよ」

「それで、一郎君までも信者にしようという譯ですね」

「ええ、その方が大切なんです、此頃では、本人も信仰に入らなくては、絶対に駄目だつていわれるんですよ。初めのころは、わたし一人でもいいつていたんですがね」

「病氣がなおらないのは、信心が足りないからつていうのが、きまり文句ですからね。しかし、それでは眞心ではありませんよ。病氣をなおして下れ、お金が儲かるように、しうとさんがやさしくなつて下れ、その代り、一生懸命信仰します。これでは、信仰でも眞心でも何でもありません。こうするから、こうしてくれ、これは一種の取引きで、別に、宗教でも信仰でもありませんよ。信仰というのは、自

分をぬきにして、佛さまにおすがりする。理窟もつけぬ、注文もしない。ただ駄つて、ありがたいと拜む心ですよ。ひとにすすめられたり、強いられたりではなしに、心の底から、自分の意志で、手を合せることですよ。浄土眞宗ねホラ本願寺で有名なお宗旨を開かれたし、らん聖人は、お師匠さんの法然上人（浄土宗の開祖）のお教えに従つて、一生懸命にお念佛をとなくて、『たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ』法然上人のいわれるとおりにお念佛をして、その結果、地獄へおちるようなことがあろうとも、少しも後悔しない。ただもう、法然上人を、そしてまた、法然上人を通じて、彌陀如來のありがたさに、たよりすがつて行くだけ。注文も理窟もない。心にこうと決めたからは、地獄におちようとも、念佛はつづけるのだというわけですね。これが本當の信仰ですよ。あなたの家は先祖代々お念佛の宗旨ですよ、亡られたあなたの呉那さんも、お念佛で往生されたのですよ。それを、ただ病氣をなおしたいからといつて、題目にかえるのは、今までの薬がきかないから、今夜はほかの薬をというのよりひどいですよ。そんなことでは、眞底からの信仰とはいえません。むすこさんがいやがるのは當り前ですよ。……

それに、あなたは題目々々といつて一生懸命ですが、今まで、その半分でも、お念佛を唱えたことがありますか。

何によらず、ギリギリのところまで、眞剣にやつてみるこれが大事です。心を入れかえて、眞心からお念佛をとなくてごらんない。題目を唱えてもなおる病氣なら、お念佛では、もつと早くなおるでしょう。今までろくにお念佛を唱えないで、題目の方がいいというのは、自分の持つてゐる立派な寶の價值を知らずに、他人の持つてゐる土偶をほしがる子供みたいなものです。ここををよく考えて、少し冷靜になつて、私のいつた言葉をかみしめてみるのですね。そうすれば、むすこさんも満足すれば、商賣にもはげむことが出来、家の中は急に明るくなりますよ。そうすれば、一郎君の病氣だつて必らずよくなりますよ」

「そうだよ、お母さん。和尚さんのいうとおり、今まで通り、お念佛を朝晩となくて、死んだお父さんをお願いしようじやないか。その方が、きつと佛さんも喜ぶし、僕だつてずつと氣持ちがいいんだから」

「そうかね。でも私が會をぬけると、みんながおこるかだね」

「おこるよりおどかさんでしよう。罰が當るつて、そんなことは氣にすることはありません。佛さんは慈悲こそ下さつても、罰などは絶対にあてませんよ。罰は本人が自分で勝手に、悪いことがあるときに、罰ぢやないかと想像するだけのこと、入る時にはエビス顔、出る時にはエンマ顔そんな教團は宗教教團でも何でもありませんよ。仲間が一

人へることを嫌がるのは、テキヤ仲間かゴロツキの集まりです。そうでなければ、それこそ信仰の自由ですから、堂々と、大手をふつてもとの道を歸つても、文句をいわれる筋はありません」

「和尚さん、ありがとう。まあ、これでお袋もきつと考えなおすでしょうし、今日、お参りに來た甲斐もあつたというものです」

「いや、どういたしまして。まあしつかり療養して、お母さんを早く安心させて上げるんだね」

三

この頃では、ひと頃のような、あくどい、しつっこいすめ方で、信者を増やそうとする教團も、段々に、おちついて來たようです。それでも、まだまだ、社會の裏側では病氣になつたり、不和な家庭にむかつて、時にはおどかしたりして、信仰をすすめるものがあります。ことに近頃は都會を離れて、農村にこうしたことがみられるようです。

いづれにしても、こうしたものにおびやかされるのは、自分の信仰、または信念がぐらついてゐるからです。菩提寺を自分の家と思ひ、先祖の精神的遺産を守りぬくことが大切です。それには、ためらうことなしに、お念佛一本槍で行くことです。すすめられて、それではためいにやつてみようとか、おどかされて、それは大變とあわてたりすることは、結局、最後に馬鹿をみることです。本當に、そん

なによいものなら、何も、骨を折つてすすめなくつても、自然にどんどんひろまつて行く筈です。ところが、あくせくと信者を獲得するのに大童な教團に限つて、一方では入るが、その代りに、少したつとドンドン出て行つてしまつて、差引それ程でもないというのが實狀です。

人は何といつても、自分が一番可愛い。その自分が病氣になつたり、自分の一番大切な子供が死んだりすると、どうしても心が動揺するのは仕方のないことです。しかし、ちよつと待つて下さい。それは、佛教で一番いましめてゐる「我」がもとになつてゐるためです。このことについては、他の先生方から、いづれくわしいお話もあることでしょうが、お念佛でも（題目でも）この「我」をもとにしていたのでは、絶対にだめなんです。皆さんも、今日以後はお念佛にはげむに、どうか次の歌を忘れないで下さい。

昔、一週上人がお師匠さんの法燈國師の處で修行して、唱ふればわれも佛もなかりけり

南無阿彌陀佛の聲のみぞして

という歌を作つたところ、法燈國師はまだまだといつて、ほめて下さらなかつた。そこでなお一層修行した結果唱ふれば我も佛もなかりけり

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と、聲さえもなくなつたところに、本當のお念佛の姿があることを發見されたそうです。

大 樹 寺 を 訪 ね て



大 橋 俊 雄

五萬石でも岡崎さまは

お城下まで船がつく

見たか聞いたか岡崎さまの

お馬印の三つ團子

花は櫻木、人なら武士よ

武士と謂れば三河武士

何處ともなく、町の彼方から流れくるメロデ
ー。岡崎小唄に誘はれて岡崎驛頭に降り立つ
た。香花御宗門として浄土宗が發展し得る素
地をきずきあげた大樹寺は、在家五重の發祥
地でもあつた。こゝに一度は訪ねて見たいと
は思ふたものの、其の期を得なかつたが、本
誌からの依頼により、今日の日を迎へたので
あつた。

一

大樹寺のそもぐの始まりは、徳川(松平)
氏との關係に始まる。此の寺は高月院、信光
明寺と並んで三河の三箇寺と呼ばれ、徳川家
の菩提所として、江戸封建社會には可成りに
高い殊遇を受けていた。

岡崎から足助に通ずる縣道を行くこと凡そ
四里、九久平から更に東加茂郡の山中に入れ
ば道は次第に細く、山の冷氣が身を包む頃、
道も極はまつたと思ふ臺地の上に白壁の屏を

めぐらした古寺——松平家祖先の菩提所高月院
が、家康お手植と傳える松の大木の間に見え
始める。松平と呼ばれる此のけわしい山中の
一角が、三河八代の祖太郎左衛門親氏が應永
の頃東國から流れ流れて來、土地の豪族在原
氏に婿入りして、次第に勢力を張り出した創
業の地である。親氏は新田源氏の末といい、
足利氏の壓力からのがれ、僧形に身をやつし
て徳阿彌といつたが、ここに還俗して土地の
名をとり松平氏を名乗つた。その館跡は寺か
ら程遠からぬ松平神社のあたりといい、親氏
等だけが夜だけ住んで敵に備えたといはれる
城跡は、その館跡から南へ五町、今その跡に
立てば東と北はけはしい山々に包まれ、西に
開けた展望は矢作の流れをこえて、はるかに
名古屋にさえも目をとろかすことが出來
る。

三河松平八代の創業はなみなみではなかつ
た。松平を根據地として、三代信光は岩津に
更に四代親忠は安城に、七代清康に至り漸く
岡崎に進出し、着々勢力を擴げて行つたとは
いうものの、此の間に於ける犠牲や危機も大
きかつた。しかも清康は織田信秀との戦に、
守山市附近で二十五歳の若さで家來に殺さ
れ、その子廣忠も我が子竹千代(家康)を人

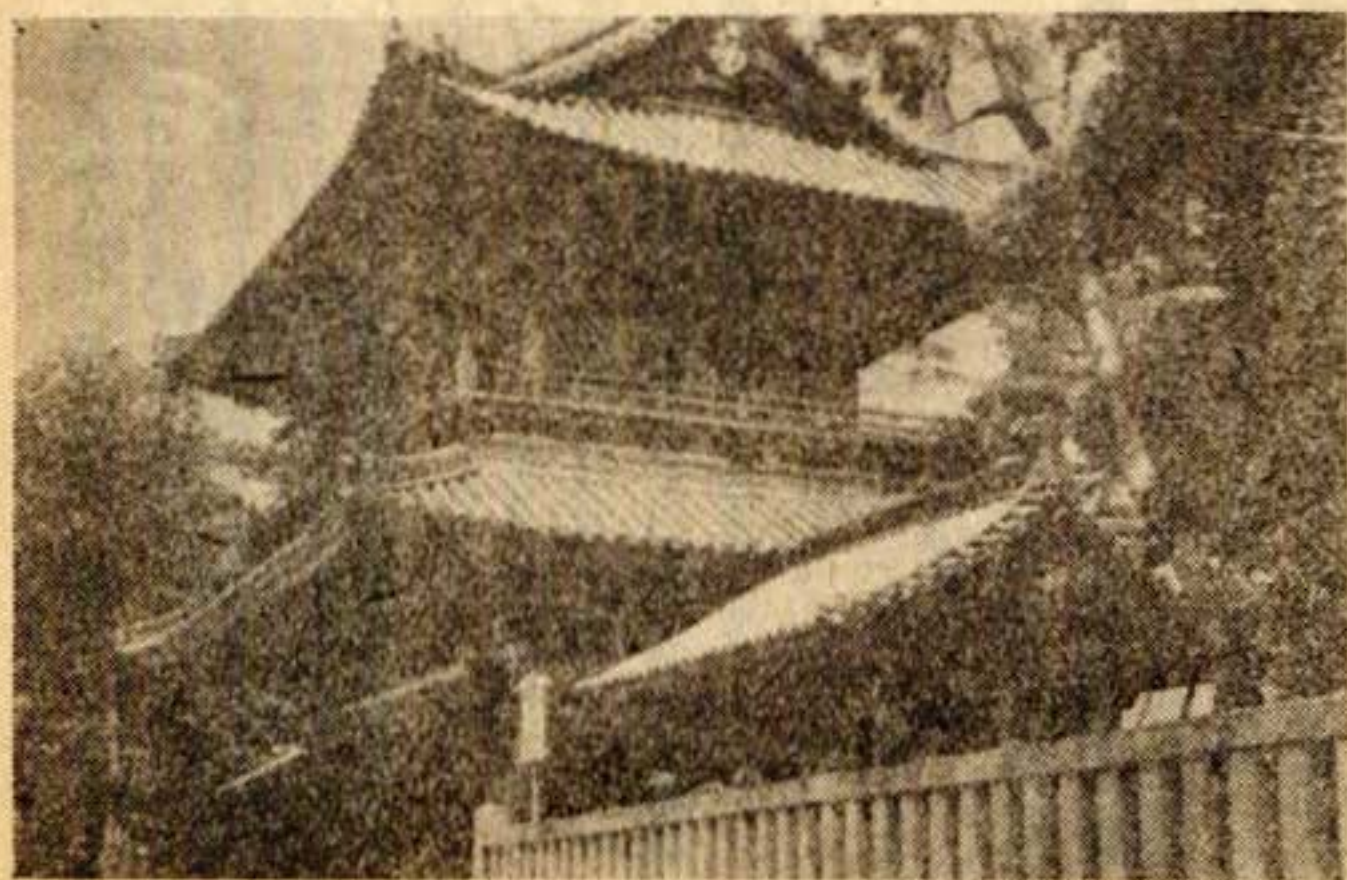
質に、今川義元の助けを求めて、信秀と戦い三河地方を平定したが、これも二十四歳で家臣に殺されてからは、當主の居らない岡崎城は、今川氏の占領政策下に文字通りの暗黒時代がつづいたのであつた。六歳の時から今川家に養はれた竹千代は義元の姪築山御前を妻に迎え、十八歳の時には義元の西上に従い、孤立した大高城への兵糧運びに成功、更に翌年の桶狭間前衛戦では、鷲津・丸根のとりでを落し、初めて武將としてのすぐれた素質をひらめかせたのであつた。しかし、次に來るべき桶狭間の合戦に、義元の勇圖むなしくあえない最後をとげたことを知つた家康は元祿三年五月、大高城を引き揚げたが、岡崎には未だ今川方の守兵が残つていたため、先祖親忠公の建立したが松平の菩提寺大樹寺に入つた。この時、家康に従つた者僅かに十八人、織田方の激しい追撃に死を決した家康は、父廣忠の墓前で切腹をはかろうとしたが、時に住僧登舉上人は「今、その身の死ぬ時ではない、武人が世を静め、天下の苦しみをなくすることは、佛の道と一つである。死んで花實が咲くものではない」と懇にといさめられ、墨恨あざやかに「厭離穢土」「欣求淨土」と認められた。その二つの白布を松の木にかか

げ、僧や村民を動員して、寺に攻め寄せる織田勢を防いだといはれる。中にも祖洞という七十人力の快僧は寺門の貫木かんぎをふりかざし、群がる織田方をなぎ倒したといい、今に貫木は神格をあたえられ、御貫木神として祀られ、將軍の代る毎に岡崎城主と大樹寺住職を供として、江戸に參府したが、道中この貫木に會つたものは百萬石の大名としても土下座して道をゆずらにばならなかつたという。それ程の威嚴が此の貫木に附與されたのであつた。こゝに危機を脱し得た徳川家康はやがて、完全に天下を掌握するに至つたのであつた。

二

大樹寺が建立されたのは文明七年というから今から凡る四百八十年ばかり前、親忠公は井田野の戦いに犠牲となつた死者を吊うため、恰かも近郷宇禰部福林寺に守り智徳兼備の誇高かつた勢譽愚底上人を請じて開山と仰いだのであつた。寺建立の上は何と寺號を定めたらよろしいかと問うた時、上人は「あなたの子孫七代の中からは必らずや、天下を治める將軍が出ることでしよう。されば大樹寺と號しなさい」との言葉によつて、大樹寺を

以て寺號としたというのである。今はその眞偽を問はないけれども、勢譽愚底自筆の式定に既にその名が見えている。昔、中國のある將軍が部下の功を論ずるときには必らず庭に出て大きな樹の下で公明正大にやつたことから、その人の事を大樹將軍といい、ついで一



般に將軍のことを大樹公というようになったと故事にあるが、向唐一邊倒であつた當時のインテリが、前の予言に絡ませて將軍の寺と云う意味でつけたものとも思える。それにしても、文明十年の式定に大樹寺とあり、「厭離穢土欣求淨土」の旗に「大樹公寺登興」と認された事實と、「七代の内に心ず天下を統一する者が出る」ことを予言されたという勢舉の傳語は、併せ見るに住僧の卓見非凡なることを伺い知ることが出来るようである。以來松平氏は深く大樹寺を歸依し、更に廟所をこゝに定め、子孫代々淨土宗たることを誓約したのであつた。それならばこそ、祖先を崇敬すること殊の外に厚かつた徳川家康も、五ヶ條の遺寺を残して、その中に

一、私がなくなつたら、引導法語は、江戸芝増上寺の觀智國師よりいただきたい

一、遺體は久能山に葬り、一週忌後日光山に移しなさい。我れら矢の神となり、日本六十余州を見守るであらう。

一、私のなき後は、本家本元である三州の大樹寺に位牌を安置してほしい。

一、我家は代々淨土宗であるべである

と認め、菩提寺として堂塔の修築にも努力をささげられたのであつた。

三

總門をくぐり、大樹寺小學校を左右に見て北に進めば、正面にくつきりと山門が松林の間に姿をあらわす。この寺も幾度びかの火災に伽藍の變遷があり、當初の姿をえがき出すことも出来ないが、總門山門鐘樓堂は共に寛永年中、三代將軍家光の建立にかゝり、山門高く掲げられた勅額の後奈良天皇の眞筆と云はれ、くずれ落ちかけた寺をめぐる白壁の屏に時代の色をとゞめるあわれさにしばし目をやり、山門を後にすれば正面に間口十五間の大本堂が、左手遠くに此寺最古の建築物多寶塔が、廣々とした境内の一隅に會つての規模の偉大さを誇かのように建てられている。古文書によれば、盛んなりし頃の境内には三十余の塔頭と八百四十五俵二斗四升に余る寺領（天正十七年十二月附文書）が寄せられていた。凡そ百二三十町の寺領が、寺存続のため松平一族によつて寄進されたが、その中には住職が自から買得したものも可成りあつたらしく、慶長七年には六百十六石四斗三升の御朱印を賜はつた。

本尊阿彌陀如來像は千佛光背という一寸珍らしい光背、脇壇に安置された紫檀、黒檀よ

り成る松平八代、徳川將軍十四代の位牌は、等身大のもので、家康の遺言により、位牌は全て大樹寺におさめ且つ等身大にすべきことをさとされたことに由來するのであるが、これを以て見れば當代將軍の背丈さえも知ることが出来るわけである。私は今まで等身大と云うような大きな、しかも身長を測定し得る位牌を聞いたことはない。芝増上寺のものはこれより一尺、東照宮のものは二尺、上野寛永寺のものは三尺小さく作られているといはれる。

四

本堂及び大方丈は安政二年の失火で灰燼に歸したため、十三代家定將軍は菩提所の再建に心をつくし、再建成つた堂宇には冷泉爲恭が彩筆を振つて、百七十余面の襖繪が畫かれた。彼は我國固有の繪畫土佐派の次第に凋落するのをなげいて、復古再興を企てた繪師で、江戸末期の田中納言、浮田一蕙と並び稱せられる人であり、その筆法、同じ系統にぞくし、時代を同じうするとは云へ、自然に異つてゐることは否み得ない。或人はこの相異を納言は清楚、一蕙は輕快、爲恭は洗練と評された。誠に彼の精彩無比な古實調査と洗練さ

れた針金のような描線、典雅媚妍な着色は、天才であると共に勉勵を兼ね具えたものでなければ出来得ないと思はれるほどに氣品に満ちた立派なものである。美しき瞳目するばかりに畫かれた繪を、幾度びとなく拜している中、行くことなく此の爲恭の繪が好きになつた。まるで王朝時代に生き、その中に生活しているような氣さへする。それ程、美しく畫かれた繪も、實は自分から自信をもつて畫いたのであつた。

とこしへに此を殘れや世の中の

繪と云う繪皆失せ果てんとも

と詠んでいることは、餘程の自信がある人でなければよむことは出来ないであらう。その爲恭も元治元年（一八六四）五月、大和丹波市の道路で、一時は身を朝廷に置き京都小御所の繪をものし乍らも、畫道に熱心な餘り所司代や幕府關係にまで出入したと云うかどで、志士のため四十二歳の若さで殺されてしまった。

徳川三百年を通じて、將軍や諸大名の參拜の多かつた大樹寺には、其等參詣の人々をお通しする控室がしつらへられている。しかもそれは將軍のみしか入ることの出来ない「御成の間」と、御三家専用の「下段の間」、そ

れに三十五萬石以上の大名は鶴の間、五萬石以上は牡丹の間、それ以下は鐵仙の間と、夫々の格式に應じて分けられたお部屋には、爲恭が彩管をとつた繪が優雅な雰囲気をもし出している。御成の間には圓融天皇の子の日御遊びの圖が、下段には三條左大臣茸狩の圖が畫かれている。それにしても、此等の部屋に入ると風通しも悪く、如何にも重苦しい感じのすることはいなみ難い。敵の襲撃を防ぐため、がん丈な鎧戸作りになつてゐるためだといふ。又成る程とうなづかれる節もあるにはあるが。

五

朱印地として、其の羽ぶりを將軍寺としての偉名のもとに天才にとゞろかしたであらう大樹寺も、農地改革以後の地方寺院と同様、農地の開放によつて大きな痛手をうけた。この反面、近くの九品院は、以前からの傳統をつぎ民衆の寺として一般人から信仰され、親しまれている。こゝに傳説の恐ろしさをさまざまと味うのであつたが、そのきづなを斷つて民衆と共にある寺にするには如何にあるべきか、こゝに住職の惱みもあるらしい。格式の高く、一般人の詣でることさへ出来なかつ

た江戸時代の長い傳統は今にもその影響をあたへ、自然遠のけられてしまつた。これを如何にしたらよいか。世人に大樹寺のある所以を知らせるのが今の段階のようだ。人々から親しまれなかつた寺を、急に民衆の寺とするのも至つて困難のようだ。昔は昔、今は今と云う觀念ではわりきれぬものがあるらしい。寺の收入のみで維持し得ない此の寺は、住職の布教々化にその一分を依存しているが、それを又今後にまで持ちこすことは考えて見なくてはならない寺が本來の在り方から離れて、觀光の寺としての運命を辿ることは深くいましめなくてはならないが、寺院の教化活動をよりスムーズにするための方便としてのかゝる活動は必要なことであらう。

大樹寺の發展を祈り、東一の門、二の門を後をあとに、歸京の旅についた。





隨蓮の往生

—本願の念佛—

村 上 博 了

元祿十年正月十八日、東山天皇より元祖法然上人に賜つた、圓光大師號勅書に、

即是肉身如來、何疑三勢至權述三朝帝師 德重千當時

とたたえられ、その傳化は、

四流良導 行應千末代

と記され、人類萬世の師表なりと讃嘆渴仰された。

この勅書は、その事實をありのまま表現されたものであつて、上人一代の行績は、正に四海の良導、人類の灯火であつた。

元久元年十一月七日の起請文添書には、僅か三日の間に、門弟百八十九名が署名してゐる。二祖聖光（鎮西國師）は鎮西に在り、石垣金光は奥州に在つて、その名が見えない。上人身邊の主だつた門弟衆である。

扱て上人と門弟との間柄を説明するものは、平重衡が上人に遇つただけで満足して斬られ、熊谷直實は上人にあうや、その言葉を聞いた丈で感激していること等は、二祖聖光が、

「我が大師釋尊は、ただ法然上人なり」

と、常にもの語られたことを以て、筆説に盡し難い感化力があつたことを傳えている。念佛の功德と云う可きか。

二

隨蓮は、花の京都、四條萬里小路に住んでゐた。全くの律義な實直者で、云はば感じ性の、にぶい人と思はれる程、心根からの善人であつたらしい。

上人が法話をせられる時には、どこでも、何時でも、その素朴な姿を、見かけぬ人は、いないと云はれたほどの熱心な、ひたむきな信者であつた。

上人の御開示によつて、生き甲斐を見出し、念佛の生活をつづけていたのである。

上人も亦よく、目をかけられて、その一途の純信な信仰心を、この上もなく愛していられた、配所へ旅立ちの時には、お伴を許されたほどであつた。上人の御教示をいただと、必ず身を以て、すぐ實行に移す性質であつて、人にも大變愛されていたのである。上人御遷化の三年目の建保二年夏の頃、或人が隨蓮に向つて、

あんたは、いかに念佛するとも、佛教の戒定慧の三學を學んで、三心を知らなくては、往生は出來ないよ

と話しかけた。隨蓮は之に對して、

師表上人は、念佛は様なきを、ようとす、只佛語を信じて、念佛すれば、往生が出來ると仰せられて、全く三心のことは、仰せ出されなかつたです

と返事をした。念佛は様なきをようとすと云うことは、上人の御法語に、

念佛を、申し候ふことは、やう／＼の義候へども、只六字を、唱

ふる中に、一切の行は、をさまり候ふなり。心には、本願をたのみ、口には名號をとなへ、手には念珠をとるばかりなり。つねに心を、かくるが、きはめたる決定往生の業にて、候ふなり。

と、示されたことを指すもので、「只援け給へ」と念佛することである。

「只佛語を信じて」と云うことは、専修念佛を指しているが、御法語に

本願の念佛には、ひとりだちを、せさせて、すけをささぬなり。

すけといふは、智慧をもすけつさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。

善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛して、たゞ生れつきのままにて、念佛する人を、念佛にすけさぬとは云ふ也。

さりながら、悪をあらため、善人となりて、念佛せん人は、佛の御心に叶ふべし、かなはぬ物故に、とあらん、かくあらんと思ひて、決定心おこらぬ人は、往生不定の人なるべし。

と、云はれることである。

三

かの人重ねて云く、

すべて、馬鹿な者の爲には、方便として、左様に仰せられたのである、抑々上人の御素意ほと、

經文論釋などの義を引用し、ことこまやかにもの語られた。隨蓮之をきいて、「或はそうかも知れない」と、いささか疑心を起すに至つたのである。而るに或夜の夢に、

法勝寺の西門より境内に這入つて、みれば、池の中には、いろいろの蓮花が咲きみだれ、香氣馥いくとして、自然に心たのしく、尙

も歩いて行くと、西の廊下近くに出たのである。

隨蓮は、きざはしに登つて見れば、法然上人は、北座南むきに座していられ、隨蓮をみとめられると「これへ」と召されたので、其御言葉に従つて、ま近に進んだところ、隨蓮が、まだなにも申上げぬに先立つて、上人の給く、

汝が、心になげき思こと、ゆめ／＼煩うべきではないと仰せられた。

隨蓮は、このこと誰にも告げて、いない、どうして判つたのであらうかと考へながら、心中の疑念の點を、詳しくお話申し上げたところ、上人の仰せられるは、

「假令へば、ひがごとを云う者があつて、あの池の、蓮花を蓮花ではない、梅だ櫻だと、云はれたならば、信ずるや、いかに」「はい、現に蓮花であるものを、いかに人あり、云ふとも、信じません」

「念佛の義も又かくの如し、源空が、汝に、念佛して往生することとは、決定して疑なしと、教へたことを信じたならば、蓮花を蓮花と思うが如し。深く信じて、とかくの、沙汰に迷はず、只念佛を申すがよい、あらぬ邪見の梅櫻の義をば、ゆめ／＼信じ迷うべきでない」

と仰せ示されるとみて、夢さめのたである。

ことは夜に托してあるも、本願の念佛は、信じて唱ふれば、往生の素懷を遂げ、その功德は又現當二世の利益を成ずるものである。

隨蓮の疑念は、のこりなく散じ、今までの如く、念佛申して、正念往生せられたのであつた。

(御傳と御法語より)

——記——日——印——滯——(四)——



——也——眞——井——日——春——

—頭と髪の手—

インドに来てしばらくたつたが何かものたらない氣がしていた。はじめは何の事か判らなかつたが、しばらくしているうちにようやく判つて來た。それはフツと思ひ出せそうに氣持のおちつくような種類のことであつたが、そのことはインドの老人は腰のまがつた人が減多にないということと、頭の禿げている人が極めて少いということであつた。佛陀傳記で有名な四門出遊の物語のところにも老人を見て人生の悲哀を覺られるところがあつた。こういうところが日本に居るとき心の中に残つていたのであるが、ここサンチニケータンに居ると事實老人も居る。近所にすむセ教授の御老父は九六歳というが腰もしやんとして白い頭髮を美しく整へ白いベンガリーのドウテイをまといつて夏でも用心の爲かカシミヤの軽いショールを肩にまきつけて長い竹杖をつき乍ら、立ちどまつて合掌して挨拶されるのを見ていると、この世ながらの淨らかな人間像のシンボルの様な氣がする。この人たちが毎夕散歩に出て樹下に五六人も出合つて憩いながら聲に出して話し合つてゐる圖を時々

見かけることがある。何か日本では想像出来ない老人の樂しみの光景である。腰のまがらない理由はいろいろ數へ上げられるであろうが、子供のときから胡座して座る習慣、食事でも軽く四回に分けてたべること、ミルクを澤山飲むこと、十二時ごろから二時間ほど晝寝することなど風土から生れた必然的な制約がこうした結果を生むのであらうか。インドに充滿してゐる貧困階級が解放されたのちは恐らく世界の人間の樂園の圖を想像することが出来る。頭の禿げないことは何か別の理由があるらしい。學校を出てすぐアルゼンチンの船會社に勤務して行つた私の友人の一人が二年ほどたつてすつかり頂上を薄くして歸つて來たのを思ひ出して見るとやはり食事の關係がある様だ。インドでは男も女も十一時ごろの日盛りには沐浴して體溫を冷すのであるが、この時は勿論頭から水をかぶるのであるから、こんな事も關係がありそうだ。そしてそのあと椰子からとれる油を精製した髮油をたつぶりぬつておくこともこの土地の風習らしい。インド婦人は斷髮・パーマというのもし時々はあるが大多數は長い黒髮を誇らしく垂れたり結んだりしてゐるのは日本の明治大正時代を思ひ出させるほどであるが、椿油の宣

傳が語る様にやはりここの髪油は黒髪に良い様である。インド人は男も女も全部日本人と同じ様に髪の毛は漆黒である。カラスの方が灰色に煤けてゐるのもおもしろい。

—インド人のバックボーン—

日本でも京都の大原女などは男も女も頭にものをせて運ぶのであるが、インドではすべてのものを頭にのせて運ぶ。或日の夕方であつた久しぶりに美しいここの日没を見に行くとために大學構内を少し出離れた開闢地まで出た。遠くから御詠歌のようなりズムが聞えて來た。部落に住むサンタル族の娘たちが労働からの歸りである。朝の出かけには素肌にくまなサリ一枚をまとつただけの姿で嬉々とし巻髪にした黒髪に道々つた赤や黄の香ぐわしい花を挿して歌いつつ群れて行く女子労働者である。見るともなしに見ると何か中空を動いて來るものがある。目をさだめて見つめても何か判らなかつた。やがて近よつて來たのを見ると商賣道具の鐵の鐵部を頭にのせて柄のほうを中空にピンと立てて歩いて來てゐるのであつた。魚屋でも果實屋でも籠に入れて頭にのせて賣り歩いてゐるのであつた。牛の糞はインドの生活必需品であつて、

石炭のつけ木には牛の糞はなくてはならぬ材料なのであるが、これは落したての牛の糞の乾かないものを集めてこねなおして丁度手頃の大きさに薄くセンベイ形にして乾したものである。手に觸れて見てもすつかり香はしくもとの乾草の香にかへつてゐる。牛の胃や腸というローラーを通つて來た純粹のバルブ質？だけになつた代物なのだろうか。これも大きな籠に入れて賣りに來るのであつた。一アソナ（大體日本の五圓）でセンベイ形のもの十枚位である。列車の驛に居るボーターは日本の赤帽ならぬ赤シャツといふか赤の上衣といふか薄よこれた赤い上衣を着て群れてゐる。彼等も荷物を全部頭に乘せて運ぶのであつた。はじめサッチニケータンに赴任するときハウラ驛で大きい金屬製のトランクに望月辭典七冊と小野玄妙博士の佛書解説大辭典十二冊そして大正大藏經を五冊も入れた重いものを一人で頭にのせて列車まで五百米も運んだ男には首の骨が折れるのではないかとひやひやしたのであつた。彼はどうしても二人で手ではこぶことを拒んで一人でもつて行つた。これは荷造のとき手傳いに來て呉れた佛大の學生諸君は四人がかりでやつと運んだ重さのものであつた。

インド人のバックボーンは良き意味にしる悪しき意味にしる随分強いのである。

—インド・チャイナ・ジャパン—

日本ではバラ作りが大流行だといふ新聞の記事があつたので氣をつけて見ると此處サンチニケータンにもバラ作りの熱心家が數人ゐる。バラは確かに美しいがどうも東洋固有のものではない。イギリスとアメリカと比べるど、どうもアメリカの方が熱を入れてゐる様だ。「五月のバラ」といふ慣用語があるが、インドのバラの時期は五月ではない。ところが英語人種が自分の好きなものは他の人も好きだろうといふ有難くない行きすぎた思いやりからか、いろいろの國にこのローズを以て名づけられた花がある。「インドのバラ」はつつじの學名の直譯なのであるが實際には石楠花のことで別の名を「アルプスのバラ」とも云うのである。在印の外人が夏の避暑地で見かけて名づけたものであらうか。シナのバラは眞赤な花瓣をつける佛華華のことであるが、日本のバラ（ジャパニーズ・ローズ）とは椿の花のことである。椿は英語もフランス語も同型でカメラアといふのであるから、ラルース辭典で調べるとジェスキットの宣教師カ

メリイが東洋からヨーロッパにもたらした花であるという。他のことで名を残すより、この花とともに世界に名を知られるジョセフ・カメリイの心が偲ばれる。英語のローズというところを辭典で引いて見ると八十項以上の派生語があるのを見てもバラという字を好む風潮が判るといふものだろう。インドの十月はモンスーンが終つたところで各種のバラが咲き出した。近所から毎朝早く露をたわわにつけて朝日に目覺めたばかりの花を頂くのが、このブージャ休暇(十月)の日常になつてしまつたが、バラの高い香につつまれながら食事をするのは楽しいものだ。インド・チャイナ・ジャバンの共通につかわれるものはインキがある。インディアン・インクでもチャイニーズ・インクでもジャパニーズ・インクも同じく墨の事である。そしてこれと最も大きな文化的な關係のあるものは佛教文化なのであるところから見ると、この三つの國は過去に於ても現在も未來も同じ精神文化の紐帶をもつて結ばれてゐるということが出来るであらう。

— 壺の飲料水 —

日本の家の子供の繪を見ると電燈のぶらさ

がつた家の中にはダンスとその上にラジオが置いてある。テーブルの周りには二三人の人がゐて新聞を讀んでゐる父親らしい人も畫かれるであらう。インドの家はこういう具合には畫きあらわされない。ここサンチニケータンの官舎に住んでゐる人たちであつても、外を裸足で歩いて來た足のまま室内に入る。そこはコンクリートである。もつとも入口のところが二三段高くなつてテラスになつてゐる。靴をはいて來た人は、そこで脱ぐのである。家の中にはダンスなどを置いてある人は全くない。ラジオは煉瓦壁のところどこをくぼめて作つてある棚に置くだけである。部屋の間には素焼きの壺がある。その中には飲料水が入つてゐる。インドの空氣は乾燥してゐるので、夏の熱風がこの素焼の壺の表面からにじみ出る水から氣化熱を奪つて壺の水の溫度を下げるのである。壺の水はいつまでも冷たくて飲むのに氣持がよい。素朴なインド人の生活の中に用いられてゐる極めて科學的なそして安價で便利な飲料水の保存法である。土民の家は、土の上に薄く牛糞を混じした土をぬりつけてあるだけである。四周は泥壁である。その中に薄い布を敷いただけのところへちかに寝るらしい。しかしこんな粗末な

家に住んでゐても、飲料水は同じ様な様式で保存してゐる。そして朝の洗面はインド人は小さな金屬製の壺に二・三合の水を入れて右手に受けて顔をぬらす様にするだけである。このとき手を動かして顔は動かさないのである。ずつと以前私はシナの人達と一諸に長く生活したが、彼等は日本人と同じ様な洗面の仕方ではあるが、手を動かさないで顔を動かすのであつた。時々戯れに眞似ても見たが仲々思う様にサッパリと洗へなかつた。やはり長い習慣から生活の中に入り込んでゐるいろいろな要素は一寸した眞似などではかへることは出来ないものだ。こうしたことを考へるとここサンチニケータンの日本學部の使命も簡単に考へられる様にシンプルなものではないことが判つて來る。自己陶醉に陥るのは容易であるが、そんな事では何年経過しても無意味という外はないであらう。私の場合には佛教經典の梵・巴・藏・漢に互る諸譯對照研究という便利な手段があるのであるから、私はいまここで佛教徒であることの喜びをしみじみ味つてゐる次第である。この機會に恩師佐藤密雄先生、山口益先生の學恩を感謝する次第である。

光と美の世界

佐藤賢順

觀無量壽經の教えは四つの部分に分けられますが、そのうち第四の、名號の付屬ということが、最後に残つてゐるお話でした。付屬とは法を傳えることです。南無阿彌陀佛を稱えよという教えを傳えたのです。

前にも一度述べたことですが、このお經の終りに、釋尊は「汝、よくこの語ことばを持て」とは、即ちこれ無量壽佛のみ名を持てというなり。」といわれました。これはこのお經が説かれたとき、韋提希と同席していた弟子の阿難に對して言われた言葉で、汝なんというのは阿難を指しているのですが、むろん、韋提希も、この「汝」の中には含まれています。お經にはこういう形式はよくあるので、釋尊は大勢の聽衆の中の、最長老に呼びかけて、全體への呼びかけを代表しているわけです。この「汝、よくこの語を

持て」というのが名號の付屬であります。唐の善導大師はこれを解釋して、「今まで定善じやうぜんと散善との兩方面の利益りやくを説いてきたけれども、阿彌陀佛の本願からいえば、衆生をして専ら阿彌陀佛のみ名を稱えさせることが本意である。」と註釋しています。

そして念佛を稱える者は「人中にんぢゆうの分陀利華ふんだりけなり。觀世音菩薩、大勢至菩薩その勝友となる」とも説れています。分陀利華ふんだりけというのは Pundarika (フンダリカ) 白蓮華のことで、妙好華などともいいます。淨土教の信仰の深い念佛者を妙好人めうこうじんというのはこれからきたのです。

さてこうして佛名を稱えることによつて、八十億劫生死の罪を除き、阿彌陀佛の西方極樂に生れることができる、とお經は結んでおりますが、極樂とは一たいどんな所で

しうか。そのおおよその有様は前にお話した定善の十三觀を順々に辿つていけば、描けることでしよう。幸に、私ども過去の文化財の中には、この極樂の有様を、觀經に説いてある通りに、克明に細大漏らさず書いた圖像があるのです。それは淨土曼陀羅とか淨土變相圖とか呼ばれているもので、大和の當麻寺にその原圖だといわれているものがある。當麻曼陀羅ともいわれております。觀無量壽經に説いてあることを描いたものですから、正確には觀經曼陀羅と呼ばれています。曼陀羅とは完全な車（輪圓具足）という意味で、完全無缺な世界を表わしているということなのです。

當麻寺の曼陀羅は中將姫の傳説で名高いので、皆さん御存知でしょうが、この曼陀羅の書かれた緣起繪卷が國寶として鎌倉の光明寺に傳えられております。これによりますと、この曼陀羅は鎌倉時代の初め頃、よこはぎのおとどという人のむすめが發願して蓮の絲で織つたものだということです。よこはぎのおとどは誰れのことかわかりませんが、これが後に中將姫傳説として、潤色されるのです。淳仁天皇の御代、この女が深く佛法に歸依して、生きた如來を拜もうとして七日を限つてある寺へ參籠する。或る日、一人の比丘尼が現れて、「九品の教主（阿彌陀佛）を拜もうというならば、その相を表わしてあげよう。早く

蓮のくきを百駄、集めなさい」と告げる。そこで早速蓮糸百駄を集めさせる。すると、或る日、天女が現れて、その蓮の糸で阿彌陀佛の西方極樂世界の相を織り上げてくれる。さきの比丘尼が、「われは西方極樂の教主なり、織女はわが左脇の觀音なり」といい終ると西の方の空へ消えてしまふ、發願のむすめは聖衆の來迎を受けて、かねての望みの如く往生を遂げる、——これが緣起に描かれているあらましの筋であります。この緣起繪卷の詞書きの中に、「涙、二の袖をしぼる」とか「泣く泣くその由來を訪うに」とか「ただ涙のかわかんをもちて」とかいう言葉があつて、高度の感激を表わしていますが、中世の美しい女性や純情な庶民が、深い情緒的な感傷の悦びにひたつて、この繪の前にぬかずいて、よきみ國への往生を願う姿を想像すると、羨しい氣持にもなります。

當麻寺のは大變大きなもので、一丈五尺あるといいますが、これが原圖となつて、これの三分の一か五分の一位の大きさのものが、かなり廣く普及されております。そこにはどんな繪が書いてあるかといひますと、觀經に書いてあることは何もかも皆、書き込んであります。東洋の藝術は無の藝術、空の藝術だといわれて、禪宗の繪畫（例えば牧溪の柿など）のように、簡素枯淡に、墨一色で、できるだけ省略して氣持だけを描くのだといわれます。確かにそれ

が東洋の繪畫の特質であることには、私も異論はありません。しかしその反面、東洋、佛教には有の藝術ともいうべきものがあつて、色彩は金、群青、綠青、藍、黃、赤、紅といったような、目もまばゆい原色を思い切り使つて、何もかも悉くを描き込んでしまふ藝術があるのです。それが曼陀羅藝術で、觀經曼陀羅はその中でも最も絢爛豪華なものであります。

では觀經曼陀羅はどんな圖柄かを、お話しましょう。尤もこれは實物を示すかテレビでもお見せするかしなれば、十分解つていただくことは困難ですけれど、止むをえませんから、あらましの構圖を話で描いていきましょう。

まず圖柄を外陣と内陣に分けます。外陣は右と左と下の三方の邊でありまして、これが細長く區劃されています。この邊にはすべて觀無量壽經に説いてあることが、繪卷物風に描かれています。右の邊には下から上へと王舍城の悲劇物語が描かれます。お斷りしておきますが、右とか左とかいいますのは繪に向つて右ではなく、繪の方を中心にして繪を眺める人に對して右ということです。これは古い言い方ですが、今はこの言い方に習つておきましょう。左の邊には前にお話した定善十三觀が、上から下へ、十三のコマに區切つて描かれています、面白いのはそのどの場面にも、妃の韋提希が侍女をつれてぬかずいていることです。下の

邊は左から右へかけて散善九品の繪で、九つの型の人間がそれぞれ佛の來迎を受ける時の有様が描かれています。これは外陣ですが、内陣の方はどうかというと、阿彌陀佛の極樂淨土の國土と佛とが實に克明に、殆んど左右同形的に、描かれています。外陣が王舍城の物語とか定善十三觀を順々に描くとか、いうように、空間の上に時間的經過を表わしていますのと同様に、内陣も繪卷物風にいくつかの會座(場面)に分けられるのです。大きく六つの場面に分ける分け方と、細かく九つの場面に分ける分け方とがあります。これは念佛行者が極樂に往生してから、次第にその位を高め、終りには最も高い佛の覺にまで至る場面を順々に描いてあるのです。繪の下の方の池の中に、裸の赤ん坊が蓮の花に乗つて菩薩に付添われているのは、新しい往生人を象徵しているのです。それが次第に上の方の高い位に進んでいつて、佛の仲間入りをするまでになります。その經過が時間的に描いてあります。中心には阿彌陀佛が左に觀音、右に大勢至を従えて蓮華座の上に趺坐しています。その觀音、勢至がそれぞれ十七人の聖衆(菩薩)を従えているのです。

下に舞臺があつてそこでは天人が伎樂を奏して舞いを舞い、池には蓮が開き寶の船が浮んでいます。空にも天人が舞い、鳥が飛び交い、樂器が鳴り、華が雨つています。一

體どの位の數の佛や菩薩や人や鳥が描かれているか、ちよつと數えることもできませんが、丹念に數えた人の話によりますと、内陣だけで阿彌陀佛の數二十八體。菩薩の數、二百四十五體。池の中の往生人、二十六人。上品二人。合せて三百一體。それに鳥の數が十六。もし外陣をも合せて數えたらどうなるかといいますが、凡^{ぼん}聖^{しょう}人^{じん}畜^{ちく}、合せて五百九十九體という龐大な數になります。誠に曼陀羅の名にそむかないわけであります。

極樂淨土は、光と美の詩人唐の善導大師が言葉を盡して歌つてゐるように、光明に輝き美しく照り映える世界であります。しかしそれは、定善のお話の時にも申しましたように、ただ光と美の世界ではなく、更に眞實の世界でもあります。眞實の世界であるというのは、池のさざ波も鳥の鳴く聲も、諸法の實相、眞理を語つてゐるからであります。また極樂は慈悲（絶對愛）の世界でもあります。特に極樂は阿彌陀佛が衆生を救済しようとして、本願を立てられたその願力によつてできた世界である。ということは、極樂の最も大切な本質をなすのであります。衆生救済の本願とは大慈悲であります。このような光明と美と眞理と大慈悲の世界とは、どこにあるのでしうか。遠く西の方にあるといひます。しかしそれは空間的な意味での西ではありません。空間的に西の方角にある世界なら、地上の世界

と同じで、愛欲の國です。それは未來にあるといひます。しかしこれも過去・現來・未來という意味の時間的未來にあるというならば、消滅變化極らない流轉の國です。象徴的に西の方とも未來ともいひますが、それは時間を超え、空間を超えた絶對永遠の世界、無量壽の世界、現實を超えた世界、それによつて現實が生かされる世界という意味で、ただ信仰によつてその世界に生きることができるのであります。

五日間にわたつて御請聽を煩わしまして、ありがとうございました。

(NHKより放送の要旨)

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇
區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

後記

○佳い時候になつた。庭先きの樹木の芽もあざやかな緑をなしている。とき折吹く風もよい香りをはなつ。自然の生あるものにすべてヤク動を感じる季節である。

○竹中先生多年の勞作である「宗教心理の研究」(青山書院刊・價一、二〇〇)がいよいよ出版され、五月十五日日比谷の松本樓で出版祝賀記念會が盛大に催された。正大をはじめ東大、早大その他各大學の長老、先輩、友人、門下生等先生を慕うもの二百餘名、目にしむような緑の樹立ちに囲まれた會場は宵深かくまでなどやかな清談がつづいた。

○本堂復興に幼稚園の經營にそして教壇にと最も多忙且つ至難な事情の中にあつて断えまなく研究を續けられている先生の御努力もさることながら、かげになつて惜しみなく内助の功をはらわれた奥様の御苦勞もさぞかしと思う。只、

常日苦何彼となく助力された眞野

博士の姿なきこと參會者一同に一

抹のさみしさを感じさせた。再起一日も早からんこと祈るや切なるものがある。

○長野の横内淨普師、先年藍綬褒章を授章されたが、このたび又藍綬褒章飾版を授けられた。黙々として社會事業に貢獻すること四十年、報いなき奉仕の業に對する最大のおくりもの。おめでとう。

○本號は、林隆碩、三枝樹正道、昆野秀賢の各師より玉稿をいただきページを飾ることが出来ました事厚く御禮申上ます。(宮林)

○五月を昔からサツキと云うのは早苗月の意味だと云う、夏も近づく八十八夜……。立春から八十八日目の日(二日)、世に八十八夜の別れ霜又はなごりの霜とも云う、が過ぎ、入梅、入梅が明ければ夏がやつてくる。四季の流れ行く中に何にものかを過して、

劫初より營なみ造れる殿堂にわれも黄金の釘一つ打たん

と與謝野晶子は歌っている。

「淨土」がそのイシヅエとなればと念願しております。

○ゆりかごから墓場までを目的としての社會福祉事業が施行されて四十年、その歩みは遅々としていゝるが、それにたづさわる人達の「社會福祉事業大會」が十八、九の兩日、東京體育會館に全國より八千人が集い開かれた。本宗關係者も數多く出席。十八日、宗務所に會して懇談會が開かれた。

○先月號で本宗關係の先生方の出版をお知らせ致しましたが、海をこえてハワイでも、蘭花教道師が「へちまの水」と題して在外邦人向きに佛教入門を、更に、野崎靈海師の「佛の教え」が近く刊行される。

○佐藤賢順先生の「觀無量壽經講話」は今月で終り、つづく經典講話には、福富海岳師の「阿彌陀經講話」を来月號より連載させて、いただきます。

(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年四月廿五日印刷
昭和三十三年五月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人續仰會

昭和 東京八二一八七番

若い世代の人々のために！！

大正大學教授

竹中 信常 著

宗教心理の研究

A五判 五九〇頁
定價二二〇〇圓 十實費

宗教が現代人の心理にどのように受けとられているかという
ことを、古来の學說史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗教心等をテーマとしてとり上げている。宗教を
理解し、信仰を他に傳へんとする者にとつて必讀の書である。

東京都中央區京橋二の一（鹽山ビル）

發行所

青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川區上大崎二丁目七八二

取扱

法然上人鑽仰會

振替東京 八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ！！

指導外語教授 增谷文雄 畫中村ひろし
監修 東大、大正講師 增谷文雄
教育法 然さま
まん畫

B五判 一〇四頁
定價二二〇〇圓 十實費
（十部以上二〇〇圓 十實費）

者 淨土門主

岸 信宏 貌下

大正大學長

椎尾辨匡 大僧正

増上寺法主

香月 善裕 師

知恩院執事長

渡邊 眞海 師

淨土宗務長

この本は繪ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御
教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き
出したものであります。しかも、その内容は、國寶「勅修御
傳」によつたものであります。

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

額ブランコ2人乗	¥ 13,000
額ブランコ3人乗	¥ 15,000
額ブランコ4人乗	¥ 22,000
額ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タログ送

配達費（都内横濱 500 圓以内
其他1000圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）

組立説明書送付



幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ット1で、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。

篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024 (池上驛東3分)